

プレイバックシアターを用いた生きなおし支援

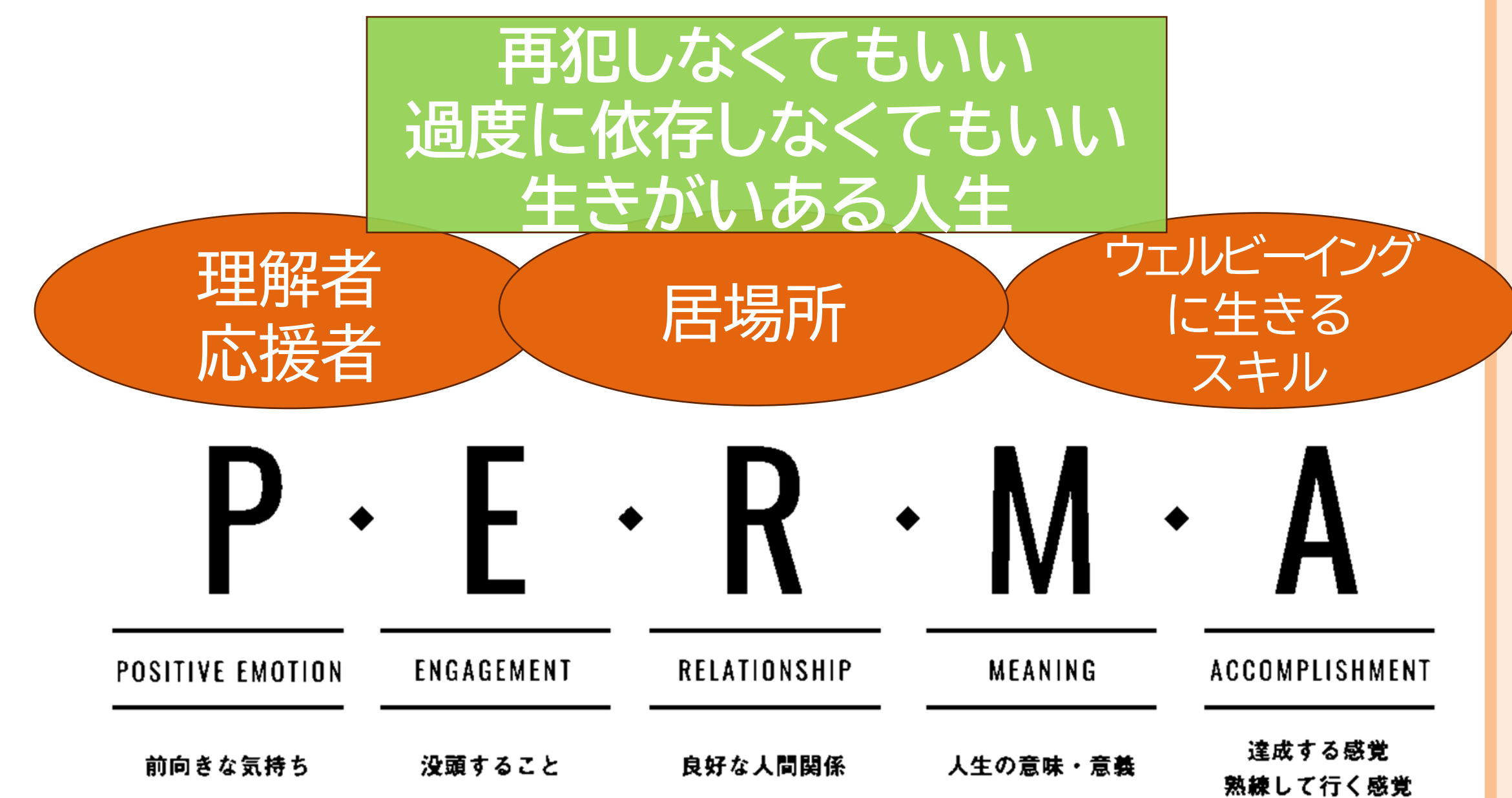
三宅隆之(一般財団法人ワンネス財団)、藤崎育子(柔らかな出偶いの即興劇かるちえ)、森田宏(ワンネス財団エモーショナルリテラシーセンター)、片桐淳(一般財団法人ワンネス財団)

ワンネス財団
Since 2005 20th
生きがいを応援して20周年

はじめに(実施の背景)

当財団は、罪に問われた人や依存症者の生きなおし(更生)支援を目的とした施設運営を主な事業としている。生きなおしには「居場所」、「理解者・応援者」、「ウェルビーイングに生きるスキル」が必要と考え、福祉支援、様々な心理社会支援を展開している。

支援カリキュラムの一環として、財団傘下施設のひとつで、定期的にプレイバックシアターを用いたワークショップを実施している。プレイバックシアターの持つ要素は、施設利用者の居場所づくりや他者とのつながりを促進し、ウェルビーイングに生きるフレームワークのひとつである【PERMA(パーマ)】の増進、なかでも利用者自身の「気持ち」についての理解、表現の支えにつながる可能性があると考えたことが、実施の背景である。



ワークショップ実施

【実施概要】

当財団傘下施設のエモーショナルリテラシーセンター(奈良県大和高田市)にて、2018年5月から現在まで、原則毎月1回、約3時間実施している。参加対象者は同施設の利用者で、全て男性、参加者は10名から20名の間で推移。なお、気分が乗らない、体調が思わしくないなどの理由があれば見学、不参加が可能な対応を取る。施設入所から退所までの間、対象者のワークショップ平均参加回数はおよそ10回である。

【実施の流れ】

スクール・オブ・プレイバックシアター日本校卒業生であるファシリテーターの指導のもと、基本的には以下の内容を実施している。
①各自の心身状態の共有、テーマを設けた短い話の共有(例:好きな事、苦手な事)、②ストレッチ、③ゲーム、④動く彫刻やペアズ、⑤昼食休憩、⑥ゲーム、⑦ストーリー(2本程度)、⑧参加者個々の簡単な振り返り

【ストーリーについて】

特に多く語られる出来事は、青年期の何らかの活動で頑張ったことが成果につながったという出来事だ。受験や部活動、仕事、恋愛など、かつては何か達成して充実した時間があったのだと、自分で自分のことを勇気づけているようにも見える。

次に多いのは、自身が起こした犯罪や過度な依存による出来事(例:借金、家族間の問題)である。劇では本人だけではなく、周囲の人たちが登場することもあり、出来事を客観的に見る機会になっている。他の参加者も、出来事を聞き、劇を見ることで自身の気持ちや経験に重ね合わせていることが多いようだ。



ワークショップ実施施設
(ワンネス財団エモーショナルリテラシーセンター)

実施結果

実施背景で述べた点について、【PERMA(パーマ)】各要素の状態を測る尺度(※)を用いて、財団傘下全施設の利用者を対象に調査した結果、ワークショップを実施したエモーショナルリテラシーセンターと、奈良県内の非実施施設との間に、数値の差が生じた。

担当ファシリテーターは参加者の変化について、「最初は苦手という人もいたが、ワークショップをどうやったら楽しめるのか、その気づきを語る人が増えたことで、場全体が良い方向へ向かっている。」、「初めは全くできないという人が、まずミュージシャンからチャレンジし、そのうちアクターになっていったという事もあった。また、他の人たちを引っ張ってくれる参加者も出てくるなど、主体的な参加が見られるようになった。」と語っている。

プレイバックシアター導入の結果 (Positive Psychotherapy Inventory)

エモーショナルリテラシーセンター利用者に2023年5月から半年間、月に1回プレイバックシアターを実施し、実施していない奈良県内他事業所とのPPTIの数値を比較した。(5件法で全25問。最高得点は125点。)

エモーショナルリテラシーセンター (N=20)		
2023年5月	2023年10月	増加数
91.05	101.22	10.17
ワンネス財団傘下 奈良県内他事業所 (N=41)		
2023年5月	2023年10月	増加数
78.51	83.19	4.68

※PPTI(Positive Psychotherapy Inventory):PERMAの幸福理論に基づいて、被験者の幸福度を評価する尺度であり、すでにいくつかの妥当性が実証されている。(Schrang et al, 2014 ; Seligman, Rashid, & Parks, 2006 など)

考察・今後の課題

ワークショップ実施施設においては、ウェルビーイングを高めていくための様々なプログラムを展開しており、プレイバックシアターのみが数値の増加に寄与したわけではないが、一定の効果は得られたと考えられる。また、施設スタッフからは、施設利用者との一体感を高めるためや、施設内の状態を知るために役立っているとの声を聞くことから、利用者個々のみならず、施設全体にとってもポジティブな影響があると思われる。

ワークショップはカリキュラムの一環として実施しているので、強制参加ではないものの、参加・不参加が明確になる。今後の課題としては、他のカリキュラムとの関連などでワークショップ参加の促進を試みることで、そして不参加の利用者の気持ちを尊重した支援のあり方を検討する必要がある。また、利用者の協力を得ながら、傘下他施設でのワークショップ実施も検討していきたい。

まとめ

プレイバックシアターの経験は、単に再犯防止や依存症脱却という観点を超え、その人の心的成長、ウェルビーイングの高まりに繋がっていると考えられる。転じて、「犯罪予防」、「依存症予防」という文脈でも活用できるのではないかと考える。